

日比谷における宝塚文化の歴史的意義と展望

共立女子大学

目的

1914年4月1日に第一回公演を行なった宝塚歌劇は、今年で100周年を迎え、様々な記念行事・公演が行なわれている。日比谷の東京宝塚劇場も、1934年1月1日の開場以来80年を数える。

本研究の副題は、「発掘された写真と映像から探る1930年代のヒビヤ・モダン」である。2011年秋、神奈川県個人宅で発見された写真や16mmフィルムが発端となっている。昭和10年前後に、藤岡宏という青年が撮影したもので、当時の日比谷界隈の風景や風俗、様々な人々の姿を今に伝える貴重な資料であることがわかった。

中でも、3本のフィルムのうち「流線美」は、1935年6月に上演された同名のレビューにちなんだ日比谷の街頭風景を含むホームムービーであり、「ラ・ロマンス」と「パリアッチ（悲しき道化師）」は、1936年に東京宝塚劇場で上演された宝塚歌劇の舞台を記録したのものとして、極めて高い歴史的価値を持つものである。これらの資料の復元・保存と分析が、本研究の目的である。

研究内容・結果

まず最初の課題は、80年近く前に撮影された16mmフィルムを、出来る限り復元し、研究・公開に耐えるものにするのであった。千代田区からの助成金のほとんども、そのために費やされた。イマジカ・ウェストのテレシネ技術によってデジタル化され、映像作家の三行英登氏の協力を得て修正処理・編集された映像は、年月を感じさせないほど鮮明なものとなり、細部に至るまで様々な発見の可能性を秘めたものとなった。当時、宝塚のスターであり、退団後は映画や新劇で活躍したものの、広島で被爆して亡くなった園井恵子の姿もあり、昨年が生誕100周年であったことから注目を集めた。

今回の研究期間中に、多様な分野からなる共同研究メンバーによって明らかにされたことの一部を御紹介しよう。

明治から大正にかけて、東京の劇場は、現在も歌舞伎座のある中央区銀座や浅草など、やや東側に多く存在していた。それが明治末に帝国劇場が建設されたのを皮切りに、日比谷・有楽町エリアにも娯楽施設が広がり、市民の憩いの場所となりつつあった。日比谷公会堂では西洋音楽の演奏会が開かれ、日本劇場や日比谷映画劇場も相次いで開場した。関西に本拠を持つ宝塚歌劇は、すでに帝国劇場などでの公演実績があったものの、東京にも拠点となる大劇場を持ち、阪急という鉄道資本が演劇興行に進出し、松竹と対峙するという図式に、経済的・社会的視点からも大きな注目を集め、新聞紙上にも様々に報道されている。

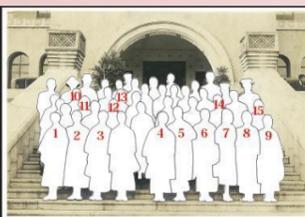
関東大震災の痛手から立ち直りつつあり、市民層が新たなモダニズム文芸を展開しつつあった時期、日比谷はその中心のひとつであった。また新しい劇場を基盤とし、PCLと合併することによって今日につながる東宝が誕生し、演劇・映画、そして雑誌文化にも新風を吹き込んだ。

宝塚歌劇も、葦原邦子や春日野八千代をはじめとする男役のスターが登場し、本格的オペラ上演も可能とする実力を蓄えていた。そうした中から、現在のスタイルを確立していった時期であった。

今回の研究対象となった写真や映像は、そうした時代の息吹を伝えてくれる生き証人のような存在なのである。



旧帝国ホテル前 集合写真



- | | |
|----------------|-----------------|
| 1. 月野花子 (20期) | 10. 葦原邦子 (17期) |
| 2. 秩夫晴世 (20期) | 11. 大空ひろみ (18期) |
| 3. 初音麗子 (13期) | 12. 秋月さえ子 (11期) |
| 4. 社敬子 (18期) | 13. 明津麗子 (15期) |
| 5. 奈良美也子 (7期) | 14. 櫻井紗子 (18期) |
| 6. 草笛美子 (15期) | 15. 瀧川未子 (2期) |
| 7. 橋薫 (14期) | * 黒田弘子氏 |
| 8. 三浦時子 (12期) | 聞き取り調査より |
| 9. 豊野かよ子 (10期) | |



考察・まとめ

本研究には、千代田区立日比谷図書文化館からの参加もあり、2013年11月には、同館の「東京宝塚劇場開場80周年カウントダウンイベントⅢ」において、映像と研究結果を一般に公開することができた。劇場・大学・図書館による、いわゆる産学公連携の事例ともなった。

復元・編集された映像を収めたDVDは千代田区で保管され、著作権者の了承のもとで閲覧・公開もできるようになる。まだまだ多くの発見の可能性を秘めた文化財として、今後とも大いに活用されることを共同研究者一同は強く希望している。